



TITLE:

マルクス管見 (平田清明教授記念號  
)

AUTHOR(S):

菱山, 泉

---

CITATION:

菱山, 泉. マルクス管見 (平田清明教授記念號). 經濟論叢 1986, 137(3): 285-295

ISSUE DATE:

1986-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/134142>

RIGHT:

# 經濟論叢

第137卷 第3号

## 平田清明教授記念號

---

献 辞	池 上 惇	
マルクス管見	菱 山 泉	1
比較経済学序説	伊 東 光 晴	12
現代資本主義と経済政策の課題	清 水 嘉 治	33
マルクスのインダストリ論	山 田 鋭 夫	54
スミス世界史像の再検討にむけて	野 沢 敏 治	71
ケネー『経済表』「原表」の マナー・フロー分析	浅 野 清	91
資本における所有・序説	八 木 紀一郎	114

---

平田清明 教授 略歴・著作日録

昭和61年3月

京 都 大 学 経 済 学 會

# マルクス管見

菱 山 泉

いわゆる分配諸関係は、生産過程と、人間が自らの人間的生活の再生産過程において相互に結び合う諸関係との、歴史的に規定された特殊社会的な諸形態に対応し、またこの諸形態から生ずるものである。この分配諸関係の歴史的な性格は、生産諸関係の歴史的な性格であって、分配諸関係は、生産諸関係のただ一面を表現するにすぎない。

—マルクス『資本論』第3巻、51章—

1 ある特定の再生産期間に、一定の剰余価値の総額が、価格と分配に依存しない、先決的数量として存在する——こうした構想が、マルクスの経済思想の核心だと思う<sup>1)</sup>。そうはいっても、剰余価値がどこか体系の一個所にまとまって存在するわけではない。そうした剰余価値は、各部門の生産過程で、ある年度に産出されたさまざまな産出物に体现しているから、生産が終わったあと、まず各部門ごとに分かれて存在するとみてよい。

資本の各部門間の競争は、部門ごとの生産条件の相違に応じて、ある部門の剰余価値を削り取り、他の部門のそれを膨らませる、こうして、結局、各部門の投下資本価値に比例するように、一定の剰余価値総額を、それぞれの生産部門に配分する。こうして成立するのが、平均利潤にほかならない。各部門に対

1) ミークは、価格、したがってまた競争から独立した「ある具体的な先決的数量」“some prior concrete magnitude”を、それから出発しなければならない「マルクスの基本的構想」“Marx's basic idea”とよぶ。こうした数量とは、「総剰余価値」“aggregate surplus value”にほかならない。同氏は、1977年、来日時の講演で、こうした数量を、「マルクス体系における要諦」と呼んでいる。R. L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, 2 ed., 1973, xxv, xxvi-xxvii; R. L. ミーク、マルクスとスラッファ、「経済セミナー」1977年7月号 36-44ページを参照。

して均一の平均利潤の水準、すなわち平均利潤率  $r$  は、経済全体のスケールで集計された投下資本価値額に対する総剰余価値の比率、 $\sum M_i / \sum (C+V)_i$  ( $i$  は特定の生産部門) に等しく決まる——こうマルクスは考えたように思われる。

2 諸資本の競争によって平均利潤が成立すると、これと同時に、生産価格も成立する。いま、任意の生産部門  $i$  における商品 1 単位あたりの投下資本価値、すなわち費用価格を  $k_i$  とすれば、単位あたり生産価格  $p_i$  は、こうした費用価格に平均利潤を加算したものに等しい。すなわち、 $k_i(1+r) = p_i$ <sup>2)</sup>。

3 経済体系が、価値-剰余価値の次元から、生産価格-平均利潤の次元へと変換したとしても、総価値=総生産価格、総剰余価値=総利潤が同時に成立するとマルクスは考えたらしい<sup>3)</sup>。

しかし、マルクスのモデルにおいて、こうした総計一致の二つの等式が同時に成立しえないことは、明らかである。なぜなら、自由度 1 のマルクスのモデルを完結させるためには、いずれか一方の総計一致の等式を仮定するだけで十分であるからだ<sup>4)</sup>。とはいえ、こうした総計一致のいずれの仮定も、現実の経済の working によって成立するという確証は、何もない。ともあれ、こうしたことは、マルクスのモデルの現実性を著しく傷つけるに相違ない。

2) この生産価格の等式は、マルクスから採った。「一商品の生産価格は、 $k+p$  すなわち費用価格プラス利潤に等しい」という定式は、…… $p=kp'$  (この  $p'$  は一般利潤率) であり、したがって生産価格は、 $k+kp'$  に等しい……」本稿では、利潤率の記号を  $p'$  の代りに  $r$  に変更した。K. Marx, *Das Kapital, Kritik der Politischen Ökonomie*, Dritter Bd.; Erster Teil., Moskau, 1933 [以下 *Das Kapital*, III-1 と略称する], s. 190, 向坂逸郎訳「資本論」(岩波文庫), (8), 昭和27年, 306ページを参照。

3) 一般的平均利潤率の定義から、総剰余価値=総利潤、すなわち  $r\sum(C+V)_i = \sum M_i$  であることは明白。*Das Kapital* III-1, ss. 181-82, 「資本論」(8), 292-94ページ参照。総価値=総価格については、次のマルクスの一文が参考になる。「かようにして、社会そのもの——すべての生産部門の総体と見られた——においては、生産された諸商品の生産価格の総額は、諸商品の価値の総額に等しいのである」。*Das Kapital*, III 1, s. 184, 「資本論」(8), 296-97ページをみよ。

4)  $k_i(1+r) = p_i$  において、 $k_i$  は定数、決定すべき未知数は、 $r$  と  $p_i$  であるから、この連立式モデルは、自由度 1。かくて、 $r\sum k_i = \sum m_i$  ( $m_i$  は  $i$  部門の単位あたり剰余価値で、定数) か、もしくは、 $\sum(k_i + m_i) = \sum p_i$  が与えられると、このモデルは、完結し、 $r$  と  $p_i$  は決定する。このモデルを、 $k_i(1+r) = a_i p_i$  と書き、 $a_i$  を単位あたり各商品の価値、 $p_i$  を、価値からの生産価格の乖離度を示す係数とみなしてもよい。いずれにせよ、総計一致の二つの等式は、同時に成立しえない。なお次の著作をも参照。L. L. Pasinetti, *Lectures on the Theory of Production*, 1 ed., 1977, 泰山堂・山下博・山谷恵俊・瀬地川敏訳「生産理論」, 昭和54年, 29ページ。

4 マルクスの価格モデル  $k_i(1+r)=p_i$  のいま一つの難点は、やはり、生産過程の投入側にある  $k_i$  が価値ターム、産出側にある  $p_i$  が価格タームで表示されていること、にある。

ところが、小麦の生産に鉄が投入され、鉄の生産に小麦が投入される再生産の構造を仮定する場合、ひとたび、各部門の産出側にある商品が価格タームで表示されると、どの部門の投入側に現われる商品も、必然的に価格タームで表示されざるをえない。例えば、製鉄業の生産に投入される鉄鉱石、コークス、石灰石などは、他部門の産出物であるけれども、こうした諸産出物が生産価格で表示されると、製鉄業の生産過程の投入側にある「不変資本」は、残らず価格タームで表示されるはずである。かくて、製鉄業で生産的に消費される不変資本は、実際には、生産価格で表示された鉄鉱石、コークス、石灰石など生産手段の集計額でなければならない。「可変資本」についても、これとほぼ同様のことがあてはまるだろう。

5 マルクス自身、生産過程の投入側にある商品を価格タームで表示すべき必要性を知っていたように見える。次に引用する歯ぎれのわるい一文<sup>5)</sup>がそれを証している。

以上に与えられた展開によって、諸商品の費用価格の規定にかんしては、明らかに一つの修正が入って来る。最初には、一商品の費用価格が、その生産において消費された諸商品の価値に等しい、と仮定された。しかし、一商品の生産価格は、その買手にとっては、その費用価格であり、したがって費用価格として、他の一商品の価格形成に入り得る。生産価格は、商品の価値と一致しないことがあり得るのであるから、他の商品のかような生産価格が含まれている一商品の費用価格もまた、その商品の総価値のうち、その商品に入る生産手段の価値によって形成される部分よりも、ヨリ大またはヨリ小であり得る。費用価格のこの修正された意義を銘記すること、したがってまた、一特殊生産部門において商品の費用価格が、その商品の生産に消費された生産手段の価値に等置される場合には、常に誤謬が可能であるということを銘記すること、が必要である。

5) *Das Kapital*, III-1, ss. 189-90, 「資本論」(8), 305ページ。

要するに、ある商品Aの生産価格は、それを購入して生産手段として投入する商品Bの生産部門にとっては、その費用価格を形成する1要素であるから、こうした場合、商品Bの費用価格は、それを構成する諸商品の価値ではなく、（一般にそれから乖離する）生産価格で表示されねばならないというわけである。ところが、マルクスは、この文章につづけて「われわれの当面の研究にとっては、これ以上詳しくこの点に立ち入ることは必要でない」<sup>6)</sup>と述べ、分析をここで打ち切り、費用価格を生産価格で表示することの含意を明らかにせず、に終わった。マルクスが、何故、これ以上の分析を断念したか、その理由について、推論することは不可能ではない<sup>7)</sup>。

6 ともあれ、マルクスのコメントを待つまでもなく、首尾一貫した価格モデルを構築するには、ある再生産体系の諸部門を網の目のように結んだ、生産手段の補填関係を想定すると、どの部門についても、生産過程の投入側に入る諸商品は、産出側と同じく、生産価格で表示されねばならない。かくて、投入側と産出側とに現われる商品のそれぞれが、物量的に（すなわち使用価値量として）、クォーターやトンといった技術的単位によって表示され得ると仮定すれば、次のような単純なモデルを示すことができる。

$$\begin{aligned}(280 p_1 + 12 p_2)(1+r) &= 575 p_1 \\ (120 p_1 + 8 p_2)(1+r) &= 25 p_2\end{aligned}\tag{1}$$

ここで、 $p_1$ 、 $p_2$  は、それぞれ、小麦と鉄の価格、 $r$  は、均一の一般的利潤率である。

6) 同上。

7) 諸商品の費用価格が、価値から乖離した価格で表示されても、それが「常に諸商品の価値よりも小さいという命題が正しいことに変わりはない」。つまり、生産によって費用価格を越える剰余価値を生むことに変わりはない。とマルクスはいう。そして「特殊生産部門」については、価格が価値から乖離するけれども、「社会的総資本の場合」、すなわち「生産される諸商品の総量についていう場合」には、価値＝生産価格であるから、生産価格ではなく価値で表示しても、集計的には問題はないと考えているようだ。しかし、総価値＝総価格の命題は、確実な根拠をもたないから、こうしたマルクスの推論は、甘い。いずれにせよ、生産価格論の枠組では、あらゆる数量が価格で表示される必要があるという単純な事実を注視することが、大切なのである。*Das Kapital*, III-1, s. 190, 「資本論」(8), 305-6ページをみよ。

連立式(1)に示されたモデルは、小麦栽培と製鉄業についての次のような生産過程を前提している。

280クォーターの小麦+12トンの鉄→575クォーターの小麦

120クォーターの小麦+8トンの鉄→25トンの鉄

投 入

産 出

上の生産過程のいずれについても、投入側は、生産手段と（労働者の賃金財である）生活手段の双方から成ると考えてよい。そうすると、連立式(1)のモデル<sup>8)</sup>は、二つの商品のどちらか一つを価値尺度財とすれば（すなわち  $p_1$  または  $p_2=1$ ）、完結し、どの部門についても均一の利潤率が、生産価格の決定と同時に、それと同じメカニズムを通じて、決定するであろう。

7 つぎに、こうしたモデルの含意を、マルクスのそれと対比しながら、明らかにする必要がある。マルクスのモデルでは、価格と分配に対し先決的な独立の数量として、社会的な剰余価値のプールが考えられていた。しかし、このモデルでは、こうした所与の数量として、175クォーターの小麦と5トンの鉄から成る（物量すなわち使用価値量としての）社会的剰余が仮定されている。すなわち、物的に把握された小麦の一定量と鉄の一定量とから成る「合成商品」が、ここでの社会的剰余である。というのは、経済全体としてみると、小麦の産出物575クォーターのうち、（280クォーター+120クォーター=）400クォーターの小麦が、両部門で生産的に消費されるから、小麦175クォーター分の剰余が残る、他方、鉄の産出物25トンのうち、（12トン+8トン=）20トンが、経済全体で生産的に消費されるので、鉄5トンの剰余が残るからである。

これを次の表によって説明すると、より明快になる。

	小麦	鉄		小麦	鉄
	280	12	→	575	0
	120	8	→	0	25
計	400	20	→	575	25

8) このモデルは、スラッフアの「剰余をふくむ生産」モデルの2商品のケースに等しい。P. Sraffa, *／*

この表の第1行は、280クォーターの小麦と12トンの鉄を投入して、575クォーターの小麦を産出することを示し、第2行は、120クォーターの小麦と8トンの鉄を投入して、25トンの鉄を産出することを示す。第3行は、経済全体として、400クォーターの小麦と20トンの鉄を生産的に消費（投入）し、575クォーターの小麦と25トンの鉄を産出することを示している。かくて、両部門をひくくめてみると、175クォーターの小麦と5トンの鉄から成る合成商品を、社会的剰余として、純産出していることになる。

こうした事情は、生産部門（商品）の数の多少にかかわらない。いま、有限個（ $n$ 個）の要素から成る産出ベクトルを $x$ とし、スラッファ-レオンチェフの投入係数行列を $A$ 、剰余生産物のベクトルを $y$ とすれば、 $n$ 個の産出物とそれらに対応する $n$ 個の剰余生産物の関係は、次式のようになるであろう。

$$x - Ax = y \quad \text{あるいは} \quad (I - A)x = y$$

すなわち、 $n$ 個の生産部門から成る再生産の技術構造 $A$ が与えられると、社会的剰余 $y$ が、確定的な物量のベクトルとして、合成商品の形で得られる。連立式(1)のモデルに表わされた2商品のケースでは、175クォーターの小麦と5トンの鉄が、そうした社会的剰余にほかならない。

ところで、175クォーターの小麦と5トンの鉄から成る社会的剰余が、それぞれの部門に前払された資本に比例して配分される。そして、こうした社会的剰余の各部門間への配分と同時に、均一の利潤率と諸商品の生産価格とが、決定する。なぜなら、社会的剰余と各部門に投下された生産手段（および生活手段）とは、異質的な財貨の二つの集計量であるから、価格を知ることなしには、各部門間に比例的に配分しえないし、また一方、諸価格は、社会的剰余の配分、すなわち均一の利潤率の成立以前には、決定しえないからである。

こうした構想が、マルクスのそれに類似していることは明白であるが、マルクスと違う決定的な点は、各部門に比例的に配分される社会的剰余を、価値量

*Production of Commodities by Means of Commodities: Prelude to a Critique of Economic Theory*, 1 ed., 1960, p. 6, 菱山泉・山下博訳「商品による商品の生産——経済理論批判序説——」, 昭和37年, 8-9 ページ参照。



ではなく、物量（使用価値量）で把握すること、にある。

8 大ていの生産部門では、その生産に投入される諸商品と産出側に現われる商品とが、異質的な使用価値量から成るから、投入を越える産出の純超過分、すなわち剰余を、物量（使用価値量）で把握しえない、したがって、剰余を把握するには、異質的な物量（使用価値量）を通約する価値にかんする理解が不可欠である——こう、マルクスは考えていたように見える。こうした考え方は、マルクスの重農学説に対するコメント<sup>9)</sup>に、明瞭に現われている。

労働力の価値とその価値増殖の利用との差異——したがって、労働力の購買がその使用者にもたらす剰余価値——は、すべての生産部門のうち、農業において、……最も明白に、反対の余地なく現われる。労働者が年々歳々消費する生活手段の総額、または彼が消費する素材の量は、彼が生産する生活手段の総額よりも少ない。製造工業では、一般に、労働者が直接に彼の生活手段を生産することも、また彼の生活手段を越える超過分を生産することも、見られない。その過程は、購買と販売によって、流通のいろいろな行為によって、媒介されている。そして、その過程を理解するには、価値一般の分析が必要とされる。農業では、それは、労働者によって消費された使用価値を越えて生産された使用価値の超過分〔力点は引用者〕に直接に現われており、したがって価値一般の分析がなくても、価値の性質に関する明確な理解がなくても、把握されうる。

マルクスによると、農業では、投入側と産出側の双方に、小麦しか現われなから、価値にかんする理解がなくても、労働者の消費する小麦量を越える小麦の産出超過分として、剰余が物的に把握され得るという。農業の生産過程が、事実、このように単純なものなら、マルクスの言う通りであろうが、ケネーの農業でさえ、本当はその投入側に、製造業から購入された製品が（生産手段の補填のために、「原前払の利子」という名目で）入るから、マルクスの言うように、必ずしも単純な1財（小麦）モデルで農業生産をつかみ得ないであろう。

9) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert* (herausgegeben von K. Kautsky), I, 1923 (1 ed., 1905), ss. 36-7, 岡崎次郎・時永淑訳「剰余価値学説史」（国民文庫），（1）62ページ。

それはともかく、マルクスが看取しえなかったのは、諸生産部門の全体を考える場合、社会的剰余が<sup>6</sup>、先の例でいうと、175クォーターの小麦と5トンの鉄というように、確定的な物量の集合（すなわち合成商品）として、一般的には、剰余生産物のベクトル $\mathbf{y}$ として、把握しようということ、である。なるほど生産部門のそれぞれについて見ると、マルクスが見たように、1財モデルの農業といった特殊ケースを除き、一般的には、物量（使用価値量）として、剰余を把握することはできない。けれども、すでに見たように、網の目のように連関した諸生産部門の全体を見透す立場からは、それが可能である。

社会的剰余は、なにも単一の数量（スカラー）でしか表示されえないというわけではない。それは、物量の集合（ベクトル）によっても、立派に表示されるはずである。これを要するに、部門ごとの観点からは、剰余を物量（使用価値量）で把握することはできないけれども、諸部門全体の観点からは、それを物量で把握することが可能だという、一見、逆説的な結論に達するのである。

9 社会的剰余を、価値量で掴むか、物量で掴むかという観点の相違は、ある意味で、哲学の違いに根ざしている。マルクスは、経済現象の表皮をつき破った奥底にある、目に見えない、まして触れることもできないもの、普通の意味で観察可能でないもの、に本質的な要因を見ようとした。目に見えるもの、とくにブルジョアの目に映じたままの現象、すなわち観察可能なものは、ものごとの真の姿、すなわち本質の映像そのものではなく、皮相なもの、むしろそれをゆがめ、ある場合には逆立させて見せるものでさえある。

商品の生産において費消された、生産手段の価値を控除した後に残る商品の価値、この与えられた、商品生産物において対象化されている労働量によって規定された価値量が、労働賃金、利潤、地代として、独立した相互に依存しない収入形態の態容をとる、三つの構成部分に分解されること、——この分解は、資本主義的生産の露出表面においては、したがってそれに囚われた当事者の観念においては、逆倒されて表示される<sup>10)</sup>。

10) K. Marx, *Das Kapital*, III-2, s. 923, 「資本論」(9) 1970年, 90ページ。

かくて、資本主義的再生産の途上に現われる、価格や分配の現象の背後には、本質的な要因である価値の動きがひそんでいる。商品の価値は、社会的に必要な抽象的人間労働（投下労働）の「結晶として」（als Kristalle）、具体的な商品の使用価値に宿っている。こうした価値、したがって、その集計としての社会的な剰余価値は、そうした価値量を担う、異質的な諸商品の一定の集計量に対象化された投下労働の総量であるが、むしろ、こうした具体的で異質的な使用価値量（物量）そのものではない。後者は、少なくとも原理的には、目で見ることも、手で触れることもできる、普通の意味で観察可能な数量であるけれど、前者はそうではない。社会的な剰余価値を、測定可能な価格の集計量で代替することもできない。なぜなら、諸資本間の競争は、一般に、諸商品の生産価格を、それぞれに対応する価値から乖離させ、それに伴って、それらを集計した特定の価格量を、それに対応する価値量から乖離させるからである。

要するに、マルクスのモデルでは、諸商品の価値、総生産手段の価値に新しく付加された価値額、さらに社会的な剰余価値は、いずれも、生産諸関係とテクノロジーに規定された、一定の再生産の体系においては、価格や分配から独立した所与の大きさ<sup>11)</sup>であり、これらの数量こそ、資本主義的生産の運動によって本質的な諸要因をなすともなされたけれど、生産価格の形成や分配現象のように、定性的ばかりでなく定量的でもある文脈においては、すこぶる不明確な数量であることは否めない。価格が価値から乖離する世界においては、社会的な剰余価値は、むしろ観察可能な数量ではない。まして、諸価格の動きを透視し、そうした集計の価値量（剰余価値）を確実に捕捉しうる日鏡などありはしない。いずれにせよ、こうしたことは、どうひいき目に見ても、マルクスの理論から、リアリティを解剖する分析用具としての価値を、奪い去るものである。

10 スラッファは、その画期的な著作<sup>12)</sup>のなかで、社会的剰余を価値量から物

11) マルクスの「あらかじめ与えられた価値の大きさ」‘vorausgegebenen Wertgröße’ という言葉に注目せよ。ibid., s. 926, 前掲書, 94ページ。

12) P. Sraffa, *op. cit.*

量に変換する。すなわち、剰余価値のプールから剰余生産物としての合成商品の定量へと変換する。こうした変換は、一部分、スラッフアの哲学に根ざしていると思う。その著作のどこにもその名を記していないが、スラッフアは、ベティのものの見方を継承する者だといってよい<sup>13)</sup>。ベティは、たんに統計学や計量経済学の父ではない。マルクスが看とったように、政治経済学の父である<sup>14)</sup>。ベティの『政治算術』にある次の言葉<sup>15)</sup>は、経済学の接近法に直接関係するもの、とみなされるべきであろう。

私がこのことを行うばあいに採用する方法は、現在のところ余りありふれたものではない。というのは、私は、比較級や最上級の言葉のみを用いたり、思弁的な議論をするかわりに、（私がずっと以前からねらい定めていた政治算術の一つの見本として、）自分のいわんとするところを数・重量または尺度を用いて表現し、感覚に訴える議論のみを用い、自然のなかに突見しうる基礎をもつような諸原因のみを考察するという手づきを取ったからであって、個々人のうつり気・意見・このみ・情念に左右されるような原因は、これを他の人たちが考察するのにまかせておくのである。実際のところ、それら〔うつり気等々〕を基礎としては、（かりにこれらが基礎といえるにしても、）十二分に語れるものではない、ということを私はここに明言してはばからない。

かくて、こうした接近法からすれば、マルクスの価値の規定、とくに価格や分配から独立に、予め存在する剰余価値のプールという、彼にとって要となる

13) スラッフアは、生前、トリニティ・コレッジの自室に、リカード、シスモンディにならべて、ベティの肖像画を飾っていた。私はそれを見たとき、ベティこそが、スラッフアの接近法の源流を成すものだと思ひにさった。スラッフアンのロンカッリアが、最近、ベティの研究書を著わしたが、かれも同じ思ひにかられた一人であるかもしれない。ともあれ、その著作 [A. Roncaglia, Petty, *The Origins of Political Economy*, 1983] の第2章は、経済学の方法にあてられているけれど、そこを読むと、ロンカッリアがスラッフアの方法を基点にすえて、ベティを考察していることが、行間ににじみ出ている。

14) マルクスはベティを, Begründer der modernen politischen Ökonomie とよんでいる。K. Marx, *Theorien über den Mehrwert*, I, s. 1 をみよ。Institut 版を底本とした国民文庫(1)には、このベティの章がない。

15) W. Petty, *The Economic Writings of Sir William Petty*, ed. by C. H. Hull, Vol. 1, 1899, p. 244, 大内兵衛・松川七郎訳「政治算術」（岩波文庫），昭和30年，24ページ。

思想は、確実な基礎に立つものとはいえない。なぜなら、こうした思想は、「自然のなかに実見しうる基礎をもつような諸原因のみを考察するという」(to consider only such Causes, as have visible Foundations in Nature) 手法に背馳するからである。これに反し、175クォーターの小麦と5トンの鉄からなる合成商品は、見ることも測定することも可能な、確実な基礎に立つ数量である。そればかりでない。その実在は、生産価格と利潤率の成立にとって、必要にして十分な条件を与える。いいかえれば、こうした合成商品（社会的剰余）の奥底にある、目に見えない、測定もできない価値量（剰余価値）は、このモデルで利潤率と価格を決める場合の不可欠の要件を成すものではない。これこそが、論理の必然の帰結であり、それ以上でもそれ以下でもないのである。

11 社会的剰余を価値量で掴むか物量で掴むかは、哲学の違いに起因するばかりでなく、すでに引証した、重農学説に対するマルクスの批判的コメントから分るように、数量認識の到達度ないし深さに起因する。こうした点でマルクスは、スラッファの到達した認識の水準にまで行きつかなかった。およそ、社会的剰余を、明確な合成商品の定量として把握するという認識に行きつくには、マルクスが信じていたように見える、単一の数ではなく、有限個の数の集合（ベクトル）として、数量を表象する必要がある。なぜなら、物量表示の社会的剰余とは、まさに集合としての数量、すなわち合成商品の定量にほかならないから。こうした合成商品の形をとった社会的剰余は、単一の価値量のそれより、より良くその役割を果たす、明確な数量的概念なのであるが、マルクスは、こうした認識に到達しえなかったのである。